新資料・峨山韶碩禪師の『假名法語』について

田島柏堂

一　序（『峨山假名法語』の概要）

ここに紹介する新資料の峨山韶碩禪師（一二七六―一三六六）の『假名法語』というのは、成簣堂文庫（お茶の水圖書館）に襲藏されている古寫本のことである。この寫本は、同文庫が現在まで未整理であるために、一般に未公開のものである。しかし私は、さきに峨山禪師の史料調査のため、お茶の水圖書館に特に閲覧方お願いしておいたところ、未整理の多數書籍中から、この寫本を探し出して頂き、特別の御配慮により、幸い閲覧することが出來、かつ全文の寫眞撮影を許された。その後、この本の書冊形式、構造、内容などに關して、一々檢討するに、從來の各本とは、その構造、内容などを全然異にするもので、新資料の『峨山假名法語』であることが判明した。さればこの新出資料を學界に紹介し、もつてその研究成果について敍述したいと思う。

そもそも『峨山假名法語』は、曹洞宗の總持寺第二祖、峨山韶碩禪師（大現宗猷國師）が、佛法を修行するものの心構えなどについて、說き示されたものである。本書は、いつ頃、會下の大衆に開示されたか不明であるが、恐らく總持寺住山中における提唱であろう。筆錄者は明らかでないが、禪師が提唱された際、門弟たちによつて筆錄されたものが、峨山派の人々の間に、傳寫尊重せられてきたものである。「通幻和尙喪記」（『通幻續語錄』）の面付遺付嗣法小師物件のなかに、普濟善救（通幻寂靈の法嗣・越前禪林寺開山、總持寺十二世・一三四五―一四〇六）に對して、「峨山法語遺付」と見えている。「喪記」は、峨山禪師の法嗣、通幻寂靈（丹波永澤寺開山、總持寺五世、加賀聖興寺開山、越前龍泉寺開山、妙高庵開基）が入寂（明德二年〔一三九一〕五月五日）された直後、五月十二日に筆錄したものであるから、峨山禪師入滅（貞治五年〔一三六六〕十月二十日）より二十六年後の記錄である。かくして通幻の室中に所藏されていた『峨山法語』を滅後、弟子の善救に遺贈されたことになる。

本書は、隨時に提唱されたものを、門弟たちが筆錄したも

のであるから、禪師の自筆本は傳わつていないが、寫本としては、江戸初期寛文六年（一六六〇）尾張津島の興禪寺（愛知縣津島市今市場町所在）第十三代の愚月龜光（延寶四年〔一六七六〕十二月五日寂）が傳寫して、總持寺に寄進した漢文體の法語が傳來している。これは石川縣の小間康氏が所藏されている。この他、東京海藏寺所藏の寫本があり、また『假名見性抄』（内容は、『永平開山道元大和尚假名法語』と同じ）という寫本にも、禪師の法語が付記されているが、この寫本は、駒澤大學圖書館[2]（別名『自見集』、寛永年間〔一六二四―一六四三〕寫）、高野山金剛三昧院（享祿三年〔一五三〇〕敎順寫）、尊經閣文庫（『前越州永平開山假名見性抄』、妙超寫、大超法語の前に付す）に襲藏されておる。なお宮内廳書陵部（『道元禪師法語』片玉集一四所收）、東京大學史料編纂所、金澤市立圖書館（稼堂文庫）、高野山三寶院などにも藏されている。

本書は、峨山派の門流の間に傳寫され、久しく室中に藏されてきたために、世に流布しなかつたが、禪師滅後二百九十二年、すなわち明暦三年（一六五七）に、初めて禪師の法語二篇が、『永平開山道元大和尚假名法語』（二卷・福井大學圖書館・東京山田忠雄氏藏）下卷に、付載上梓された。それより二年後、萬治二年九月に再版（一卷・東都書林須原茂兵衛、皇都書林勝村治右衛門刊・田島柏堂藏）された。この萬治版は、その後、刊行者名を削除し重刻している（駒澤大學圖書館藏）。次に元祿四年（一六九一）十二月、梅峰竺信が、『諸嶽開山二祖禪師行錄』（芳春院鳳山慧丹編）に付載して刊行した[3]。その後の刊行を見るに、明治六年二月（桂巖跋、小型本、萬治版に同じ、梅村翠山居士校正、刊・永久岳水氏藏）、明治十五年（萬治版に同じ、東京協信社刊・駒澤大學圖書館藏）、明治二十八年には、『禪門法語集』（東京光融館刊）中卷に、明治三十五年『峨山禪師行實』（東京鴻盟社刊）の末尾に、また明治四十四年二月、『禪宗聖典』（來馬琢道編、東京無我山房刊・昭和三十七年十一月〔四十八版〕京都平樂寺書店刊）、大正元年十一月『禪學大系』祖錄部第五卷の中に、さらに同九年には、『峨山禪師行實』（伊藤道海・山田靈林著、禪師五百五十回遠忌記念出版、東京玄黄社刊）に付載され、次いで翌十年には、『校補點註禪門法語集』（東京光融館刊）中卷に、昭和十年には、『禪門曹洞法語全集』（永久岳水編、東京中央佛敎社刊）坤卷の中に、同十三年には、『曹洞宗全書』法語部にそれぞれ編入され、ますますその流傳をひろくした。さらに昭和二十九年には、舞鶴桂林寺布敎部より刊行（萬治版による）され、また昨四十年三月、禪師の六百回大遠忌記念に出した拙著『總持二祖峨山韶碩禪師』（東京大法輪閣刊）の付錄に收載して刊行した。つまり明暦以來、今日に至るまでに、十八回以上にわたつて刊行されている。右の中、大正九年『行實』に收載された『法語』は、山田靈林博士により三篇に編集され、その最初の一篇は、東京海藏寺所藏の寫本か

ら、このとき新たに收錄したもので、これを「甘露白法語」と題されている。そして從來の法語二篇を收め、前者を「學道の用心」、後者を「單直不疑の性」と題名し、それぞれに脚註が施してある。この本と私の刊行した本との二本を除く他の流布本は、すべて後の方の二篇が收錄されている。ただし、小間氏所藏の寫本は、最後の一篇のみが、漢文體にて記されている。各本の關係は、だいたい以上のとおりである。つまり右のごとき內容による一篇または二篇と三篇に編集した三つの系列の本が、傳來している譯である。なお寫本と流布本とを比較對照するに、門流の間に傳寫してきたためか、傳寫の間に脫誤を生じ、字句の上に著しい相違が見出される。文體も和文のほかに、漢文あるいは漢文の書きくだし文にしたものなどが存する。

二　成簣堂文庫本の書冊形式

さてここに新たに紹介する成簣堂文庫所藏の『峨山假名法語』の書冊形式は、一冊、袋綴本、寸法は縱二十三・五糎、橫十六糎である。表、後表紙は、共に空色であり、筆寫當時のものと考えられる。題簽は、「峨山和尙法語　全」とある。恐らく本文の筆者と同一人の筆と思われる。遊び紙の右上の方に、「山金天寧公用」と書し、左方に、「天寧寺」の黑印が押してある。そこで天寧寺について調査するに、これは京都の紫金山天寧寺（京都府天田郡上川口村所在）のことであつて、同寺は臨濟宗に屬し、貞治四年（一三六五）那珂宗泰の開基で、愚中周及（佛德大通禪師・一三二三―一四〇九）が開山祖となり、のち足利義持の祈願所となつた寺院である。現在、大東急文庫には、『金山天寧寺諸回向集』（應永抄本）、『金山天寧禪寺諸回向并疏榜』（文明抄本）のごとき、室町期の寫本および成簣堂文庫本の本書と同樣の寺名黑印、または墨書のある『禪林類聚』・『禪宗永嘉集』などの五山版が襲藏されている。かような點よりすれば、本書も天寧寺に古くから置かれていたことが推考される。次に本文は、行數片面九行書きにして、一行約十六字から二十九字より成つており、上端（二糎）・下端（一糎）共、空白にしてある。紙數は、表、後表紙を除いて全部で四十七枚で、雁皮紙に謄寫されている。本文は全篇和漢混淆のスタイルで片假名にて謄寫し、全文濁點は付されていない。また全體としては、漢文の返り點も付けられていない。ただし三十餘箇所にわたつて返り點、送り假名が付されている。[4] なお振假名は、四箇所に付けられているのみである。見消（みせけち）が七箇所に存する。句讀點が朱で書かれ、また人名・國名の眞中に朱線が引いてあり、古則（公案ともいい、佛祖の言句）の上方には、朱で〇が十四箇所に存する。全紙の中、蠹損、しみはわずかに見られる程度にて、保存がよく行屆いている。

三　文庫本の構造・內容

文庫本の構造・内容は、三篇より成り、第一篇は、「峨山和尚法語」（第一丁表より第八丁裏まで）、第二篇は、無題名の法語（第九丁表より第二十五丁表まで）第三篇は、「峨山和尚過眼集」（第二十六丁表より第四十七丁表まで）の三つが蒐集されていて、いわゆる「峨山禪師假名法語集」とも名づくべきものである。これを從來の各寫本・刊本と比較するに、これらとは全文異にし、全く別の「法語」であつて、いままでに流布していないものである。されば前記いずれの系列にも屬しない、別の傳承による寫本であることが判る。その文體、思想内容などは、他の各寫本・刊本と傾向を同じうするものであることが、一見して看取できる。從つて本書は、峨山禪師の思想・禪風などが、平易にしかもよく表現されていて、その風格が文章の上に躍動している感がある。曹洞宗門にとつて、まことに珍しい貴重な寫本である。次に右の三篇についての内容の概略を述べれば、第一篇の「峨山和尚法語」には、「一輪孤月照徹乾坤」の語に初まり、五家七宗（臨濟・曹洞・雲門・潙仰・法眼と黄龍・楊岐）、五位（正中來・正中偏・偏中正・正中來・兼中至・兼中到）[5]、坐禪（禪戒一如）などについて、要領よく説示されている。第二篇の無題名の法語は、まず「如何是坐禪底」の語に初まつて、「趙州因僧問、碁逢敵手不藏行時如何」の句の註釋で終つている。この篇は、つまり古則の文意を解釋した註疏である。從來、主として室町中期頃から、江戸時代に至るまで、禪僧および學者が、漢籍・佛書（特に禪宗關係の『碧巖集』・『臨濟錄』等）などについて、その宗義・文意を解釋した註疏を「抄物（しょうもの）」と稱しているが、本篇は、この抄物に該當している。當時、禪僧の間には、佛書・漢籍の講筵を開き、訓詁註釋を書き著わして、後進の禪徒を教導することが、絶えず行われていたのである。そしてかれらは、各々門戸を張り、師弟に授受する風習があつた[6]。されば抄物は、室町時代の言語研究資料として、國語學上貴重なものとなつている。一般に抄物といえば、「……ゾ」という判斷の形がすぐ聯想されるが、この「ゾ」式の他に、「ナリ」式、「ゾ」と「ナリ」混式、まれに「ダ」式がある。「ゾ」・「ナリ」の區別は、必ずしも文語調・口語調のしるべとはならないといわれている。つまり文語的「ナリ」體か、口語的「ゾ」體か、その決定基準が甚だ複雜のようである。抄物の指定辭は、かように「ゾ」・「ナリ」・「ダ」のいずれかを單獨に、あるいは「ゾ」・「ナリ」の二つを合わせ用いているが[7]、本篇は、最後の「ゾ」・「ナリ」の兩體を混合した講義體をなしている。

そこで洞門關係の抄物には、從來どんなものが傳わつているかを調査するに、『人天眼目川僧抄』（三卷・抄者は川僧慧濟、文安元年より享德四年頃までに成立、寫本、足利學校遺蹟圖書館藏）「禪宗無門關鈔」（二卷・抄者・成立年代は不明、元和八年古活字

版、東京大學國語研究室藏)。『巨海代鈔』(二巻・天正末より慶長頃までに成立、承應二年刊、駒澤大學圖書館藏)、『大淵代鈔』(八巻・元和七年より寛永十二年の間に成立、慶安二年刊、駒澤大學圖書館藏)、『大淵和尚再吟』(三巻・代鈔と前後しての成立か、萬治二年刊、駒澤大學圖書館・龍谷大學圖書館藏)、『高國代鈔』(六巻・承應か慶安末頃の成立、萬治四年刊、駒澤大學圖書館藏)[8]、『臨濟錄鈔』(四巻・抄者は萬安英種、元和八年頃より寛永八年頃までに成立、寛永九年刊、駒澤大學圖書館藏)、『禪家四部錄鈔』(一巻・抄者は萬安英種、元和八年頃より寛永九年までに成立、寛永十年刊、駒澤大學圖書館・積翠文庫藏、正保二年刊、駒澤大學圖書館藏、正保四年刊、永久岳水氏藏、慶安元年刊、駒澤大學圖書館・田島柏堂藏、明和七年刊、駒澤大學圖書館藏)[9]などがある。以上によれば、本篇すなわちこの峨山禪師の抄物は、洞門抄物の中で、最古のものであることが確認される。しかして私は、無題名のこの一篇の法語を、從來の洞門抄物の名にならつて、ここに「峨山和尚鈔」と命名したいと思う。なおこの「峨山和尚鈔」は、今日傳わつている洞門以外の抄物(寫本・刊本合わせて約數十種存している)[10]の中でも、恐らく古いものの一つに屬するのではないかと思う。最後に第三篇の「峨山和尚過眼集」は、「夢裡明々六種在」の語に初まり、「句裡ノ宗ハ、百雜碎、宗中ノ的ハ、中閉全端的、不可開口、ト云云」で終つている。次に紙數についてみるに、この篇は二十二枚で、第一篇(八枚)・第二篇(十七枚)に比べ、枚數が一番多い。本文の割註に「又別本云、倒却門前刹竿」(三十二丁表)と記されているから、他の本と校合したことが知られる。本文の中には、「山和尚僧ニ問云」、「僧問、山和尚云」、「山和尚說破云」「通幻答云」、「大源云」、「山有時問洞谷」、「洞谷下語云」などの語が見え、またある僧と明峰素哲(峨山禪師の法兄)との問答に對し、峨山禪師の代語などが記されている。つまり本篇は、瑩山禪師と峨山禪師および峨山禪師とその會下の人たちとの禪問答、あるいは下語(禪獨特の寸評)などを集錄したいわゆる問答體の法語である。「過眼集」とは、恐らく峨山禪師によつて心の眼を開いた人たちの問答集という意味で、禪師の門人または後の編者によつて、かく命名されたものであろう。なお「永平老師云」、「永平開山云」、「永平高祖」云々との言葉が引用されておるが、ここにおいても、峨山禪師が本師瑩山禪師をとおして、道元禪師の遺風をいかに追慕されていた[11]かが窺い知られる。さらに注目すべき點は、「康安二年、十月日請益云」云々(四十四丁裏)と記されていることである。康安二年(九月廿三日、貞治と改元・南朝正平十七年・一三六二)といえば、禪師は、能登總持寺に住山しておられ、八十七歳の高齡であり、このときにおける請益の言葉を記したものであることが判る。思うにこの年二月九日には、「總持寺未來住持職補任」の制規を定められており、再度永光寺

に進住された前年であり、禪師入滅（九十一歳寂）より、四年前に該當している。右の紀年、内容などより察するに、禪師の境涯の圓熟しきった晩年時代の法語が、集錄されているように推考される。さればこの第三篇は、特に峨山禪師とその周邊の人たちとの出會いや、道元―瑩山―峨山の思想的系譜などを知悉することが出來、第一篇・第二篇と同様に、禪師の性格・思想・禪風などを基礎づける貴重な資料である。

四　書寫年代と筆者

それでは、書寫の年代および筆者は誰であるかというに、左の奥書（四十七丁表）が見えている。

長四庚辰霜月二十有三於白雲寺奉書寫之
七世法孫嗣祖比丘禪林拜謄

とある。この識語によつて、室町中期、長祿四年（十二月二十一日寛正と改元・一四六〇）陰暦十一月二十三日、白雲寺において書寫したものであることが判り、序のところで述べた「通幻和尚喪記」の峨山法語遺付の記錄より七十年後、また峨山禪師入滅より九十五年後に該當する。次いで筆寫した場所の白雲寺の所在について調査したが、いまのところ不明である。書寫した人については、禪師より七世の法孫である禪林和尚であることが判る。從つてこの和尚が、峨山派の人であることは知られるが、白雲寺の住持であるか、修行僧であるか、またいかなる地位の人物であるかということについては、全く不明である。今後さらに考究したいと思う。いずれにしても「峨山假名法語」は、峨山派の人々の間に傳寫してきたものであることが判り、右の識語によつて、この文庫本が、「峨山假名法語」の現存寫本としては、最古のものであることも知り得た。されば文庫本は、成立當初に近接した時代の唯一の現存古寫本であるから、寫本の「峨山假名法語」としての時代的價値の高いことを知ることができる。

五　結語

ともかく以上の考證によつて、成簣堂文庫所藏の寫本の『峨山假名法語』三篇が、室町中期すなわち十五世紀の中葉に、峨山禪師七世の法孫、禪林和尚により、白雲寺において謄寫された傳承系統の確かなものであることが判る。實にこの文庫本は、『峨山假名法語』の現存古寫本中、最古のものであることが確認され、その歴史的・書誌學的の價値高きを知ることができる。巷間、從來の『峨山假名法語』に對して、眞僞を疑うものが存するが、しかしいま述べたように、傳承過程が明らかであつて、歴史的價値高い書であることがわかる。『峨山假名法語』の傳承に關する書誌學的價値も、この文庫本の出現によつて、さらに高められ、かつ確實性を增大したものということができる。もつてこれが曹洞宗學思想史上、洵に貴重な古寫本であると同時に、わが國語史の資

料としても、價値のあることが認められる。峨山禪師の六百回遠忌に際して、かかる貴重本が出現したことは、何かの奇縁といわねばならぬ。

思うに、從來學者間には、漢文をもつて書かれた典籍が尊重され、和文をもつて書かれた佛教書すなわち「假名法語」は、佛教の典籍の中では、從屬的な地位しか與えられていなかつた。[12] しかし、これらは佛教ことに禪の民衆教育という視點から考えるならば、特に重視しなければならぬと思う。幸い最近においては、特に「假名法語」の重要性が、宗教界・文學界などで取り上げられ、日本宗教の近代性、佛教文學の獨自性という立場から、高く評價されている[13]ことは、誠に喜ばしいことである。もちろん當時の「假名法語」と稱する一連の文體も、現代の人々にとつては、理解の困難なものとなつてしまつた。しかし漢文體よりは、一般的に平易にして、かつ親しみ易く、理解しよいことはいうまでもない。されば過去の時代においてもつていたその進歩的性格は、決して無視することはできない。わが國で「假名法語」が發生したことは、恰もかの近世西洋の宗教改革者たちが、民衆の言葉をもつて宗教書を著わしたことや、あるいは東洋においても、中國中世の禪僧が俗語をもつて禪を語り、ヒンズー教の民衆的宗教家が、サンスクリットをやめてヒンディー語や、タミール語で神々を讃嘆した歴史的現象にも比すべきことである。[14]

しかして今後は、從來の「假名法語」を國語學的、宗教的立場より現代語譯し、もつて現代に再認識すると共に、強く將來に伸長させることこそ、假名法語なるものの今日的意義が存すると思う。この『峨山假名法語』は、今より六百餘年以前の古い言葉ではあるが、しかし古い言葉の一つ一つが現代の思想・生活などと相互にからみあい、關係しあい、融けあつて今日に生きているということを知らねばならぬ。されば從來の『峨山假名法語』三篇、この文庫本の假名法語三篇、『山雲海月』（禪師の著、漢文體で語錄として取扱われているが、むしろ法語的性格の書である）[15]、あるいは禪師生涯の事蹟などは、曹洞禪の近代性（人間性・合理性・實證性・自己探求・社會性など）および宗團の近代化（人材の養成・寺院の振興・大衆の教化など）という課題への、意味深い指針を與えてくれると思う。かかる觀點よりすれば、新資料の文庫本『峨山假名法語』は、實に明日への「新しい宗團づくり」の基礎的資糧の一つとなつていることも知られよう。

1　このたび興禪寺所藏の過去帳により、愚月光和尚とは、龜光和尚のことであり、その示寂の年月日についても判明した。なお能登如意庵輪住帳によれば、寛文六年（一六六六）八月十二日、同庵に輪住したことが知られる。この小間氏所藏本は、第一紙に「常住、諸嶽山總持禪寺、什物」と三行に記し、眞中に三寶朱印（四角）が押してある。第三十一紙には「奉寄附法語

一冊箱倶置旃、維時寛文六丙午冬　十月廿蓂」と二行に書き、年號の上に三寶朱印が押してある。また第三十二紙には「前永平兼總持後永澤二百四十世、今尾州津島興禪現住十三世、愚月光比丘欽書之」〔花押〕と三行に書き、前二行の上に三寶朱印を押し、比丘の字の上に○印が押捺してある。

2　以下は、『新纂禪籍目錄』、『國書總目錄』第一・二巻參照。

3　拙著『總持二祖峨山韶碩禪師』には、この刊行を『峨山假名法語』上梓の嚆矢と記したが、このたび前記の萬治二年版『道元假名法語』を入手し、この刊行は第三回目であることが判明した。ここに訂正しておく。

4　しかし第二篇には、返り點、送り假名は付されていない。ただし次に述べる朱の○印は、第二編のみに記してある。

5　中國における正偏五位の說には、洞曹五位（正中偏・偏中正・正中來・偏中正・兼中到）、汾陽五位（正中來・正中偏・偏中正・兼中至・兼中到）、石霜五位（正中偏・偏中正・正中來・兼中至・兼中到）の三種がある。峨山禪師は、右の中の汾陽・石霜の五位を一諸に說示されたものと思われる。

6・7　湯澤幸吉郎博士『室町時代の言語研究』、壽岳章子氏『抄物とは』（『國語學』第一〇集）、同「抄物」解說（國語學會編『國語學辭典』）、同「抄物の會話文—漢書抄による—」（『國語學』第二八集）、壽岳章子・樺島忠夫兩氏「抄物語彙研究の意義と方法」（『國語學』第四五集）、壽岳章子氏「抄物の文構造」（『文學・語學』第三三號）など。

8　以上は、外山映次氏「足利學校藏、人天眼目抄とその國語」（『國語と國文學』第三七巻第一二號）、同「洞門抄物に見える助動詞「ョウ」について」（『國語學』第四六集）、金田弘氏「東國語脈で書かれた抄物二・三—江戸初期東國方言研究資料—」（『國語學』第二〇集）、同「常牧院藏、碧岩大空抄について」（『國語學』第五四集）、同「洞門抄物、報恩錄」（『文學・語學』第三三號）、同「不出戸なる洞門抄物」（『近代語研究』第一集）、遠藤嘉基博士・壽岳章子氏「抄物目錄(1)・(2)」（『國語國文』第二二巻第一〇號、第二四巻第一號）、池上禎造氏「妙續大師語錄の抄—江戸時代初期東國文獻—」（『國語國文』第二四巻第一一號）、『新纂禪籍目錄』、慶應大學斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目錄集成』など參照。

9　その他、『大慧普覺禪師書鈔』、『無門關抄』、『碧巖集鈔』、『禪林類聚撮要鈔』、『人天眼目鈔』、『大智禪師偈頌鈔』、『永平元禪師語錄抄』、『鐵外和尙代鈔』、『鐵外和尙再吟』、『妙續大師語錄抄』、『報恩錄』、『不出戸』（巻數・抄者・編刊年・所藏者などは、煩わしいので省略する）などがある。

10　6・7・8參照。

11　拙著『總持二祖峨山韶碩禪師』（「第一章、高祖の遺風追慕」）參照。

12　中村元博士は、このような價値評價を排除したいという意味で、「假名法語」という呼稱を、「カナモジ佛教書」または「カナガキ佛教書」と呼んでおられる。同博士「カナガキ佛教書—展望」（『日本宗教の近代性』〔中村元選集第八巻〕第三編）。

13　中村元博士前揭書、玉城康四郎博士「ルネッサンスと宗教の

近代化」（中村博士前掲書附錄）、藤村作博士編『增補改訂日本文學大辭典』第六巻「法語」、久松潛一博士編『改訂新版日本文學史』中世「法語」、宮坂宥勝博士『假名法語集』解說（日本古典文學大系第八三巻）、中村博士「同集の書評と紹介」（『鈴木學術財團研究年報』第一巻）唐木順三氏『佛教文學集』解說（古典日本文學全集第一五巻）、東京大學中世文學研究會編『中世文學研究入門』「法語」など。

14　中村博士前掲書。

15　拙著『總持二祖峨山韶碩禪師』（「第二章、著書と禪風」）參照。

【附記】この新資料の『峨山假名法語』は、拙著の出版後に研究調査することができたので、遺憾ながら同書には收錄されていない。いずれ改訂增補の際に、收載したいと思う。なおこの研究に當り、種々便宜を與えられ、何かと御協力を賜わった宮内廳書陵部、お茶の水圖書館、大東急文庫、駒澤大學圖書館、愛知縣興禪寺、東京山田忠雄先生等の各位に對し、深甚の謝意を表する。

新刊紹介（二）

現代人の佛教　全一二巻（＊印既刊・一一巻）

1「智慧と愛のことば——阿含經*——」　增谷文雄
2「眞理の花たば——法句經*——」　宮坂宥勝
3「實踐への道——般若・維摩經*——」　石田瑞麿
4「永遠の世界觀——華嚴經*——」　玉城康四郎
5「いのちの世界——法華經*——」　紀野一義
6「人間の願い——無量壽經*——」　早島鏡正
7「人間性の發見——涅槃經*——」　田村芳朗
8「愛と平和の象徵——彌勒經*——」　渡邊照宏
9「さとりの祕密——理趣經*——」　金岡秀友
10「東の智慧西の智慧——彌蘭陀王問經*」　石上善應
11「禪の世界——公案——」　山田靈林
12「佛教概論*」　增谷文雄

筑摩書房刊　定価各四五〇圓